

2019 年度 修士論文

箱根駅伝上位校の選手獲得と在学中の成長

Tendency of the Recruitment and Athlete Development of Strong
Prestigious Teams in Hakone Ekiden

早稲田大学 学術院スポーツ科学研究科
スポーツ科学専攻 スポーツビジネス研究領域

5018A014- 3

大杉 柊平

OSUGI SHUHEI

研究指導教員：平田 竹男 教授

目次

第1章	背景	1
第1節	近年の箱根駅伝の状況.....	1
第2節	学生スポーツにおけるリクルーティングの重要性.....	1
第3節	大学駅伝を取り巻く環境.....	2
第4節	大学駅伝チームの選手獲得形態	2
第5節	2010 年以降の全国高等学校駅伝競走大会の入賞校	2
第6節	在学中の自己記録の更新の重要性	3
第7節	先行研究.....	3
第2章	目的	5
第3章	手法	6
第1節	対象期間.....	6
第2節	対象校	6
第3節	出身校・高校ベスト記録調査.....	6
第4節	箱根駅伝出場選手輩出状況	6
第5節	箱根駅伝出場選手の在学中の成長	6
第6節	三大大学駅伝出場状況.....	6
第7節	代表輩出状況	6
第4章	結果	7
第1節	高校ベスト記録調査	7
第2節	出身高校調査	11
第3節	箱根駅伝出場選手輩出状況	12
第4節	箱根駅伝出場選手の在学中の成長	14
第5節	三大大学駅伝出場状況.....	29
第6節	代表輩出状況調査.....	30
第5章	考察	31
第1節	10 大学の選手獲得の傾向.....	31
第2節	選手獲得における特徴.....	31
第1項	10 位以内選手と 50 位以内選手の獲得.....	31
第2項	出身校から見る各大学の選手獲得戦略	31
第3節	在学期間中の成長の傾向	32
第4節	在学中の成長における特徴	33
第1項	出場選手全体の記録の向上.....	33
第2項	ハーフマラソンにおける記録の向上	33

第5節	三大駅伝出場者の定着の特徴.....	33
第6節	研究の限界.....	34
第6章	結論	35
謝辞	36	
引用文献	37	

表 1	箱根駅伝シード権獲得チーム(2012~2019 年)	1
表 2	大学別入部者数	1
表 3	全国高校駅伝入賞校(2010 年以降)	3
表 4	入学年度別 5000m 5 位以内選手獲得人数.....	7
表 5	入学年度別 5000m 10 位以内選手獲得人数.....	7
表 6	入学年度別 5000m 50 位以内選手獲得人数.....	8
表 7	入学年度別 5000m 100 位以内選手獲得人数.....	8
表 8	入学年度別 5000m 150 位以内選手獲得人数.....	9
表 9	入学年度別 5000m 151 位以降選手獲得人数.....	9
表 10	各カテゴリー別平均獲得人数	9
表 11	各カテゴリー別平均獲得人数の 10 大学内順位.....	10
表 12	入学選手の出身高校.....	11
表 13	箱根駅伝出場選手の出身高校	13
表 14	高校ベスト記録順位ごとの人数.....	14
表 16	在学中の記録の伸び	15
表 17	10 大学平均以上の伸びを記録した選手の出身高校(5000m)	16
表 18	10 大学平均以上の伸びを記録した選手の出身高校(10000m)	17
表 19	10 大学平均以上の伸びを記録した選手の出身高校(ハーフマラソン).....	18
表 20	10 大学平均以上の伸びを記録した選手の出身高校(全種目)	18
表 21	10 大学平均以上の伸びを記録した選手の出身高校(人数).....	19
表 22	10 大学平均以上の伸びを記録した選手の出身高校(まとめ)	20
表 23	青山学院の在学中の記録の伸び以上の選手の出身高校	21
表 24	神奈川の在学中の記録の伸び以上の選手の出身高校.....	21
表 25	駒澤の在学中の記録の伸び以上の選手の出身高校	22
表 26	順天堂の在学中の記録の伸び以上の選手の出身高校.....	23
表 27	帝京の在学中の記録の伸び以上の選手の出身高校	24
表 28	東海の在学中の記録の伸び以上の選手の出身高校	24
表 29	東洋の在学中の記録の伸び以上の選手の出身高校	25
表 30	日本体育の在学中の記録の伸び以上の選手の出身高校	26
表 31	明治の在学中の記録の伸び以上の選手の出身高校	26

表 32	早稲田の在学中の記録の伸び以上の選手の出身高校.....	27
表 33	各距離において上位記録をもつ人数[()内は在学中に記録を更新した人数] ...	27
表 34	大学駅伝 4 回出場者.....	29
表 35	代表選手輩出状況	30
表 36	各カテゴリー別平均獲得人数（再掲）	31

第1章 背景

第1節 近年の箱根駅伝の状況

表 1 箱根駅伝シード権獲得チーム(2012~2019 年)

	1位	2位	3位	4位	5位	6位	7位	8位	9位	10位
2012	東洋	駒澤	明治	早稲田	青山学院	城西	順天堂	中央	山梨学院	國學院
2013	日本体育	東洋	駒澤	帝京	早稲田	順天堂	明治	青山学院	法政	中央学院
2014	東洋	駒澤	日本体育	早稲田	青山学院	明治	日本	帝京	拓殖	大東文化
2015	青山学院	駒澤	東洋	明治	早稲田	東海	城西	中央学院	山梨学院	大東文化
2016	青山学院	東洋	駒澤	早稲田	日本体育	東海	中央学院	順天堂	山梨学院	関東学連
2017	青山学院	東洋	早稲田	順天堂	神奈川	中央学院	日本体育	法政	駒澤	東海
2018	青山学院	東洋	早稲田	日本体育	東海	法政	城西	拓殖	帝京	中央学院
2019	東海	青山学院	東洋	駒澤	帝京	法政	國學院	順天堂	拓殖	中央学院

2012 年から 2019 年までの東京箱根間往復大学駅伝競走（以下、箱根駅伝）において 10 位以内に入った大学は表 1 のようになっている。箱根駅伝は 10 位以内に入った大学に翌年の大会のシード権が与えられ、11 月に実施される予選会が免除される。箱根駅伝はシード権を獲得した 10 校と予選会の上位 10 校、学生連合チームによって本戦が実施される大会である。11 月に実施される予選会には 40 校前後の大学が出場し、10 枠の出場権を争っている。一方で、この 8 年間で本戦の上位 5 位以内に入った大学は 10 大学のみで一部の大学に偏っている。特に青山学院大学（以下、青山学院）は 2015 年～2018 年において 4 連覇を達成しており、上位校の常連となっている。

第2節 学生スポーツにおけるリクルーティングの重要性

箱根駅伝において上位校であり続けるためには、有望な新人選手を獲得することが非常に重要になる。学生スポーツの特徴として、選手の流動性が極めて高いことが挙げられる。表のように各大学で毎年 12~19 名程度の選手の入替えが行われている。

表 2 大学別入部者数

	青山学院	神奈川	駒澤	順天堂	帝京	東海	東洋	日本体育	明治	早稲田
2018	12	10	12	21	14	17	13	18	14	9
2017	11	11	15	16	14	11	17	19	14	11
2016	14	13	8	16	13	22	12	24	8	16
2015	11	13	12	13	18	21	12	17	8	7
2014	12	12	12	26	12	15	15	21	9	21
2013	14	9	12	25	15	16	17	19	11	21
2012	14	11	13	17	16	14	20	18	10	15
2011	12	18	12	22	20	23	13	18	16	9
平均	12.5	12.125	12	19.5	15.3	17.4	14.9	19.25	11.3	13.625

一方でプロスポーツでは、ひとりの選手が 10 年以上、同一チームに在籍する事例も多々あり、その選手が長年チームを牽引することもある。毎年選手の入替えが行われる学生スポーツにおいて、長期的に戦力を維持し、好成績を残し続けるためには、有望新人選手を継続的に獲得することが重要となってくる。

第 3 節 大学駅伝を取り巻く環境

大学駅伝を取り巻く環境は特異なものとなっている。まず、選手の高校卒業後の進路である。野球、サッカーは高校卒業後、大学に進学せずにプロ野球や J リーグのチームに加入する選手が例年一定数存在する。しかし、大学駅伝では高校卒業後に実業団チームに加入する選手はほとんど存在せず、多くの選手が大学に進学する。特に箱根駅伝出場を目指し、多くの学生が関東の大学に進学する傾向がある。そのため、大学駅伝部における選手獲得の際の競合は実業団のチームではなく他の関東大学駅伝部に限られる傾向がある。

次に箱根駅伝の人気である。箱根駅伝は毎年 30% 程度の視聴率を獲得しており、実業団駅伝の視聴率を上回っている。大学で競技を終える選手も多数おり、大学駅伝が駅伝選手の一つの目標になっているとも言える。このことから駅伝においては大学駅伝が駅伝界の人気を牽引していると言える。

以上の点から、大学駅伝は強化、人気の両面において長距離にとって非常に重要なものとなっている。

さらに高校駅伝の最長区間は 10 km であり、他の区間は 5 km 前後と 1 人当たりの走行距離は短いものとなっている。一方で箱根駅伝では全区間 20 km 超えており、最低でも倍以上の距離を走ることが求められる。走行距離に対応するためには時間が必要となり、学年が上がるごとに出場が増える傾向にある。このことから大学駅伝選手の活躍できる期間は限られているといえる。

第 4 節 大学駅伝チームの選手獲得形態

高校生のスカウトを行う際には、全国高校駅伝での実績と 5000m のタイムなどが参考にされている。しかし、全国高校駅伝は 12 月末に実施されるため、3 年生の進路はほとんど決定しており、3 年生時の実績を参考にすることができない。そのため、5000m のタイムが参考にされることが多い。高校生が主に行う長距離種目は 5000m であり、8 月に実施されるインターハイでも 5000m が最長の種目になる。

大学に進学すると 10000m やハーフマラソンといった長い距離の試合に出場することもあるが、5000m の試合が最も多く行われており、出場する機会も多い。

高校においても大学においても 5000m が最も走る機会が多く、共通して取り組まれる種目であるといえる。

こういった記録をもとに選手獲得を行っているが、大学ごとに選手の獲得方法や人数は異なる。大学ごとに入試制度が異なり、推薦枠数に差が生まれている。また、系列校の有無や数によっても選手獲得の傾向は異なる。大学によっては多数の選手を安定して獲得することができないため、戦略的に選手を獲得する必要がある。

第 5 節 2010 年以降の全国高等学校駅伝競走大会の入賞校

2010 年に行われた第 61 回全国高等学校駅伝競走大会（以下、全国高校駅伝）以降の 8 位入賞校を以下にまとめた。

表 3 全国高校駅伝入賞校(2010 年以降)

	1位	2位	3位	4位	5位	6位	7位	8位
2019	仙台育英	倉敷	佐久長聖	九州学院	学法石川	大分東明	宮崎日大	自由ヶ丘
2018	倉敷	世羅	学法石川	九州学院	佐久長聖	埼玉栄	八千代松陰	豊川
2017	佐久長聖	倉敷	仙台育英	大分東明	一関学院	浜松日体	札幌山の手	須磨学園
2016	倉敷	佐久長聖	九州学院	大分東明	伊賀白鳳	西脇工	世羅	洛南
2015	世羅	九州学院	倉敷	佐久長聖	小林	洛南	学法石川	加藤学園
2014	世羅	佐久長聖	埼玉栄	秋田工	小林	市船橋	学法石川	愛知学院愛知
2013	山梨学院	大牟田	伊賀白鳳	世羅	佐久長聖	小林	八千代松陰	学法石川
2012	豊川	西脇工	伊賀白鳳	倉敷	世羅	白鷗大足利	小林	山梨学院
2011	世羅	倉敷	九州学院	西脇工	青森山田	豊川工	浜松日体	東農大二
2010	鹿児島実	世羅	九州学院	仙台育英	須磨学園	青森山田	佐久長聖	田村

10 年間で複数回優勝を経験した高校は世羅高等学校(以下、世羅)と倉敷高等学校(以下、倉敷)の 2 校のみであった。7 校が優勝を経験しており、強豪校がひしめいている状況といえる。

10 年間に入賞した高校は 32 校あった。1 度しか入賞していない高校は鹿児島実業高等学校(以下、鹿児島実)、田村高等学校(以下、田村)、東京農業大学第二高等学校(以下、東農大二)、白鷗大学足利高等学校(以下、白鷗大足利)、大牟田高等学校(以下、大牟田)、秋田工業高等学校(以下、秋田工)、船橋市立船橋高等学校(以下、市船橋)、愛知学院愛知高等学校(以下、愛知学院愛知)、加藤学園高等学校(以下、加藤学園)、一関学院高等学校(以下、一関学院)、札幌山の手高等学校(以下、札幌山の手)、宮崎日本大学学園高等学校(以下、宮崎日大)、自由ヶ丘高等学校(以下、自由ヶ丘)の 13 校あり、強豪校の変遷があるといえる。

この 10 年間すべてで入賞した高校は一枚もなく、このことから強豪校が多く存在しているといえる。

このような強豪高校から選手を獲得することは大学駅伝強化において重要になる。

第 6 節 在学中の自己記録の更新の重要性

原は大学駅伝で勝利のためには 5000m の自己記録を更新させることが重要であると述べている。高校と大学のどちらにおいても主に 5000m のレースが行われる。5000m の自己記録を更新させることで高校の指導者との信愛関係を構築することで、良い選手を獲得することができるという述べている。各距離のタイムを向上させたことにより、高校の指導者は安心して大学の指導者に選手を預けることができるようになり、基礎力の高い選手が集まるようになったと考えられている。5000m、10000m、ハーフマラソンにおいて在学中に記録を向上させることは、競技力強化だけでなく、選手獲得においてもいい影響を及ぼす。

第 7 節 先行研究

大学スポーツの選手獲得に関する研究として、山下は大学ラグビーにおけるリクルーティング戦略を明らかにしている。大学ラグビーにおいてはユース選手の獲得、強豪校からの獲得、部員輩出校と戦力要員輩出校の一致が重要であると述べられている。しかし、チームスポーツの選手獲得状況であり、個人選手の成績を考慮した選手獲得状況については明らかにされていない。

大学駅伝選手の記録の向上に関しては原が大学チームの記録の向上について明らかにしている。しかし、個人の在学中の記録の向上については述べられていない。

箱根駅伝上位校の選手獲得と強化の両面から箱根駅伝上位進出のための戦略を明らかにした研究は存在して

いない。大学駅伝チームの箱根駅伝上位進出の戦略を明らかにすることは、大学駅伝および日本長距離の発展に寄与することができると考えられる。

第2章 目的

本研究の目的は箱根駅伝で5位以内に入ったチームの特徴を明らかにすることである。

第3章 手法

第1節 対象期間

青山学院が箱根駅伝で初優勝した際の4年生が入学した2011年から2018年までの8年間を対象とした。

第2節 対象校

対象期間中に箱根駅伝で総合5位以内に入った10大学（青山学院、神奈川大学（以下、神奈川）、駒澤大学（以下、駒澤）、順天堂大学（以下、順天堂）、帝京大学（以下、帝京）、東海大学（以下、東海）、東洋大学（以下、東洋）、日本体育大学（以下、日本体育）、明治大学（以下、明治）、早稲田大学（以下、早稲田））を対象とした。

第3節 出身校・高校ベスト記録調査

文献から、対象大学に進学した高校生の出身高校と高校在学中の5000m ベスト記録を調査した。高校ベスト記録のランキングは前年の箱根駅伝予選会15位以内（2011年のみ14位以内）の大学を対象としたランキングを使用した。

第4節 箱根駅伝出場選手輩出状況

文献から、2015~2019年の箱根駅伝に出場した選手各50名の出身高校を調査した。なお、明治は2018年に箱根駅伝出場を逃しているため、40名を調査した。

集計方法は実際の部員の人数ではなく、各部員が箱根駅伝に出場した回数で集計を行った。ある部員が2015年、2016年の2回出場した場合は、その高校の輩出数は2名と集計する。

第5節 箱根駅伝出場選手の在学中の成長

文献から、2015~2019年の箱根駅伝に出場した選手の在学中の記録の伸びを調査した。5000m は高校在学中のベスト記録と大学在学中のベスト記録を比較した。10000m とハーフマラソンは大学1年時のベスト記録と大学在学中のベスト記録を比較した。1年時に10000m とハーフマラソンに出走していない選手は2年生以降で初めて出場した際の記録と比較を行った。

第6節 三大大学駅伝出場状況

文献から、出雲駅伝、全日本駅伝、箱根駅伝に4回出場している選手の人数と出身高校を調査した。また、全ての駅伝に4回エントリーしている選手の人数と出身高校を調査した。

第7節 代表輩出状況

文献から、各大学の日本代表クラスの選手の輩出状況を明らかにした。オリンピックと世界選手権はOBを含む5000m、10000m、マラソンに出場した選手、アジア選手権はOBを含む5000m、10000mに出場した選手、U20/世界ジュニアは5000m、10000mに出場した現役選手、ユニバーシアードは5000m、10000m、ハーフマラソンに出場した現役選手、日本選手権は5000m、10000mに出場した現役選手を対象とした。

集計方法は部員・OBの人数ではなく、各部員が出場した種目の個数で集計を行った。

以上から10大学の出身校の傾向と各大学の選手獲得状況を明らかにした。

第4章 結果

第1節 高校ベスト記録調査

5000m のランキングで5位以内に入った学生の人数は以下の通りとなった。東洋が平均で0.8名の選手を獲得しており、最も多かった。次いで青山学院、駒澤、東海の0.6名となっていた。2016年には東海が3名獲得するなど、10大学ですべての選手を獲得していた。東洋は5回、青山学院と駒澤は4回獲得することができており、複数年にわたって選手獲得ができていた。神奈川、帝京、日本体育には5位以内の選手は入っていなかった。

2018年以外は60%以上の学生が10大学に進学していた。2018年は10大学に進学したのは40%であった。

表4 入学年度別5000m5位以内選手獲得人数

	青山学院	神奈川	駒澤	順天堂	帝京	東海	東洋	日本体育	明治	早稲田	その他
2011	0	0	2	0	0	0	1	0	0	0	2
2012	0	0	1	0	0	0	1	0	1	0	2
2013	1	0	1	0	0	0	1	0	0	1	1
2014	0	0	1	1	0	0	0	0	0	1	2
2015	2	0	0	0	0	1	0	0	1	0	1
2016	1	0	0	0	0	3	1	0	0	0	0
2017	1	0	0	0	0	1	2	0	0	0	1
2018	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	3
平均	0.6	0.0	0.6	0.1	0.0	0.6	0.8	0.0	0.4	0.4	1.5

10位以内に入った学生の人数は以下の通りとなった。青山学院、駒澤、東海が平均で1.3名の選手を獲得しており、最も多かった。次いで東洋、早稲田の1.1名となっていた。明治は7回、青山学院と駒澤、東洋は6回獲得することができており、複数年にわたって選手獲得ができていた。2011年と2018年は6名の選手が3校に入り、10大学の中でも少数の学校に選手が集中した。帝京には10位以内の選手は入っていなかった。

すべての年で60%以上の学生が10大学に進学していた。

表5 入学年度別5000m10位以内選手獲得人数

	青山学院	神奈川	駒澤	順天堂	帝京	東海	東洋	日本体育	明治	早稲田	その他
2011	0	0	3	0	0	0	1	0	2	0	4
2012	2	0	1	0	0	1	1	1	1	0	3
2013	2	0	3	0	0	0	2	0	1	1	1
2014	1	0	1	1	0	0	1	1	0	3	2
2015	2	1	1	1	0	1	0	1	1	0	2
2016	1	0	0	1	0	4	2	0	1	1	0
2017	2	0	1	0	0	2	2	0	1	1	1
2018	0	0	0	0	0	2	0	0	1	3	4
平均	1.3	0.1	1.3	0.4	0.0	1.3	1.1	0.4	1.0	1.1	2.0

50位以内に入った学生の人数は以下の通りとなった。青山学院、明治が平均で5.1名の学生を獲得しており、最も多かった。次いで東海の4.8名、東洋の4.1名となっていた。5名以上の選手を青山学院と明治は5回獲得することができていた。帝京、日本体育は5名以上獲得したことがなかった。特に帝京は50位以内の選手を最

大で1名しか獲得したことがなかった。

すべての年で50%以上の学生が10大学に進学していた。

表 6 入学年度別 5000m 50 位以内選手獲得人数

	青山学院	神奈川	駒澤	順天堂	帝京	東海	東洋	日本体育	明治	早稲田	その他
2011	4	0	3	3	0	2	3	1	8	2	24
2012	7	2	2	1	1	4	4	2	5	2	20
2013	5	0	5	2	0	8	6	0	4	4	16
2014	4	3	5	4	1	3	4	3	5	5	13
2015	5	2	5	5	1	5	3	3	4	4	13
2016	6	5	4	3	0	9	5	1	4	3	10
2017	6	2	6	2	1	3	6	1	5	3	15
2018	4	4	0	2	1	4	2	1	6	4	22
平均	5.1	2.3	3.8	2.8	0.6	4.8	4.1	1.5	5.1	3.4	16.6

100 位以内に入った学生の人数は以下の通りとなった。青山学院が平均で 8.0 名の学生を獲得しており、最も多かった。次いで明治の 7.9 名、東海の 7.3 名、駒澤、東洋の 6.5 名となっていた。帝京が 2.7 名で最も少なかった。青山学院、東海、東洋、明治は 10 名以上の選手を獲得したことがあった。

すべての年で 50%以上の学生が 10 大学に進学していた。

表 7 入学年度別 5000m 100 位以内選手獲得人数

	青山学院	神奈川	駒澤	順天堂	帝京	東海	東洋	日本体育	明治	早稲田	その他
2011	7	5	7	4	2	4	6	3	11	2	49
2012	9	5	6	3	1	7	5	5	8	5	46
2013	7	3	6	3	0	10	7	5	8	7	44
2014	8	6	9	6	3	5	7	7	7	5	37
2015	7	5	9	6	3	8	5	7	7	4	39
2016	11	6	5	6	1	13	9	3	5	4	37
2017	9	3	7	9	7	5	10	3	8	3	36
2018	6	6	3	7	4	6	3	5	9	6	45
平均	8.0	4.9	6.5	5.5	2.6	7.3	6.5	4.8	7.9	4.5	41.6

150 位以内に入った学生の人数は以下の通りとなった。東海が平均で 10.1 名の学生を獲得しており、最も多かった。次いで青山学院の 10 名、明治の 9.1 名、駒澤、東洋の 8.4 名となっていた。早稲田が 5.1 名で最も少なかった。東海は 15 名以上の選手を獲得したことがあった。

2011 年と 2013 年以外の年では、50%以上の学生が 10 大学に進学していた。

表 8 入学年度別 5000m 150 位以内選手獲得人数

	青山学院	神奈川	駒澤	順天堂	帝京	東海	東洋	日本体育	明治	早稲田	その他
2011	10	6	11	5	3	6	8	7	11	3	80
2012	12	6	9	5	5	10	8	6	9	6	74
2013	8	6	8	4	3	12	9	7	9	7	77
2014	10	9	10	9	6	7	9	10	8	6	66
2015	8	6	9	11	7	12	8	9	7	5	68
2016	12	7	6	9	7	15	10	5	8	4	67
2017	11	7	7	11	8	8	11	3	11	4	69
2018	9	9	7	10	10	11	4	5	10	6	69
平均	10.0	7.0	8.4	8.0	6.1	10.1	8.4	6.5	9.1	5.1	71.3

151 位以下の選手の人数は以下の通りとなった。明治が平均で 1.8 名と最も少なかった。次いで青山学院の 2.5 名、駒澤の 3.5 名、神奈川の 5.1 名となっていた。日本体育が 12.6 名で最も多かった。次いで順天堂の 9.4 名、帝京の 9.1 名となっていた。151 位以下の選手がいない年が明治は 3 回、青山学院は 1 回あった。

表 9 入学年度別 5000m 151 位以降選手獲得人数

	青山学院	神奈川	駒澤	順天堂	帝京	東海	東洋	日本体育	明治	早稲田
2011	2	12	1	10	17	16	4	11	5	6
2012	2	5	4	6	11	4	11	12	1	9
2013	6	3	4	20	12	4	7	12	1	14
2014	2	3	2	14	6	8	4	10	0	14
2015	3	7	2	2	11	9	3	8	0	2
2016	2	6	2	7	6	7	2	19	0	11
2017	0	4	8	5	6	3	6	16	3	7
2018	3	1	5	11	4	6	8	13	4	3
平均	2.5	5.1	3.5	9.4	9.1	7.1	5.6	12.6	1.8	8.3

各カテゴリーでの平均獲得人数は以下の表のようになった。青山学院、東海、東洋、明治は 10 位以降 50 位以内の人数の増加が最も多かった。神奈川、駒澤、順天堂、日本体育、早稲田は 50 位以降 100 位以内の人数の増加が最も多かった。帝京は 100 位以降 150 位以内の人数の増加が最も多かった。

表 10 各カテゴリー別平均獲得人数

	青山学院	神奈川	駒澤	順天堂	帝京	東海	東洋	日本体育	明治	早稲田
5位以内	0.6	0.0	0.6	0.1	0.0	0.6	0.8	0.0	0.4	0.4
10位以内	1.3	0.1	1.3	0.4	0.0	1.3	1.1	0.4	1.0	1.1
50位以内	5.1	2.3	3.8	2.8	0.6	4.8	4.1	1.5	5.1	3.4
100位以内	8.0	4.9	6.5	5.5	2.6	7.3	6.5	4.8	7.9	4.5
150位以内	10.0	7.0	8.4	8.0	6.1	10.1	8.4	6.5	9.1	5.1

各カテゴリーでの平均獲得人数の順位は以下の表のようになった。青山学院はすべてのカテゴリーで 2 位以内に入っていた。東海はすべてのカテゴリーで 3 位以内に入っていた。帝京は 100 位以内までのカテゴリーですべ

て最下位を獲得していた。日本体育はすべてのカテゴリーで下から3番以内となっていた。

表 11 各カテゴリー別平均獲得人数の10大学内順位

	青山学院	神奈川	駒澤	順天堂	帝京	東海	東洋	日本体育	明治	早稲田
5位以内	2	8	2	7	8	2	1	8	5	5
10位以内	1	9	1	7	10	1	4	7	6	4
50位以内	1	8	5	7	10	3	4	9	1	6
100位以内	1	7	4	6	10	3	4	8	2	9
150位以内	2	7	4	6	9	1	4	8	3	10

帝京は上位選手の獲得には成功していないが、在学中の記録更新に成功しているチームといえる。トップクラスの記録をもつ選手は少ないが、出場する選手全員がミスすることなく走り切ることで上位を獲得できていると考えられる。

第2節 出身高校調査

各大学に進学した学生の出身高校は以下の表の通りとなった。

表 12 入学選手の出身高校

高校名	青山学院	高校名	神奈川	高校名	駒澤	高校名	順天堂	高校名	帝京	高校名	東海	高校名	東洋	高校名	日本体育	高校名	明治	高校名	早稲田
九州学院	9	愛知学院愛知	7	駒大	5	前橋育英	5	清風	4	佐久長聖	8	東農大三	4	大牟田	7	須磨学園	9	早稲田実業	8
世羅	7	藤沢翔陵	6	伊賀白鳳	4	浜松日体	5	加藤学園	4	八千代松陰	6	那須拓陽	4	西脇工	5	国学院久我山	6	佐久長聖	5
豊川	4	西脇工	6	一関学院	4	小林	4	東北	4	伊賀白鳳	5	学法石川	3	九州学院	5	洛南	4	時習館	4
白鷗大足利	3	鳥栖工	6	大分東明	4	世羅	4	前橋育英	4	須磨学園	5	遊学館	3	豊川工	5	浜松日体	4	浜松日体	3
柏日体	3	藤枝明誠	5	豊川工	4	大牟田	4	八戸学院光星	3	西脇工	5	浜松商	3	洛南	5	倉敷	4	西脇工	3
愛知学院愛知	2	高知農	5	花咲徳栄	3	高崎	3	市船橋	3	九州学院	5	武蔵越生	3	浜松日体	4	世羅	4	早稲田佐賀	3
専大松戸	2	伊賀白鳳	4	市船橋	3	佐野日大	3	光明相模原	3	秋田工	4	仙台育英	2	千原台	4	伊賀白鳳	3	岡山城東	3
大阪桐蔭	2	九州学院	4	西脇工	3	専大松戸	3	市柏	3	遊学館	4	小林	2	島田	4	西脇工	3	国学院久我山	3
加藤学園	2	宇和島東	3	青森山田	3	田村	3	西条農	3	大牟田	4	鯖江	2	東北	3	豊川	2	磐城	3
仙台育英	2	東京実	3	倉敷	3	白石	3	大分東明	3	東海大附相模	4	尽誠学園	2	西条農	3	鹿児島実	2	多摩	3
佐野日大	2	西武台千葉	3	学法石川	2	富山商	3	那須拓陽	3	岡崎城西	3	秋田工	2	西京	3	愛知学院愛知	2	安積	2
西京	2	洛南	3	作新学院	2	福岡大附大濠	3	武蔵越生	3	佐野日大	3	一関学院	2	藤沢翔陵	3	多摩	2	世羅	2
青山学院	2	大牟田	2	世羅	2	洛南	3	西脇工	2	埼玉栄	3	つるぎ	2	那覇西	2	市船橋	2	鹿児島実	2
鳥取中央育英	2	豊川工	2	鳥取中央育英	2	諫早	3	札幌山の手	2	世羅	3	山形中央	2	秦野	2	鹿児島城西	2	早稲田本庄	2
札幌山の手	2	関大北陽	2	鳥栖工	2	綾部	2	関大北陽	2	大阪	2	花咲徳栄	2	清風	2	八戸学院光星	2	鎌倉学園	2
須磨学園	2	秋田工	2	白鷗大足利	2	安積黎明	2	佐野日大	2	宇和	2	鹿児島城西	2	加藤学園	2	中京	2	専大松戸	2
八千代松陰	2	松浦	2	飯能南	2	秋田工	2	鎮西学院	2	鎌倉学園	2	自由ヶ丘	2	日体荏原	2	宮崎日大	2	高崎	2
浜松日体	2	鳥取中央育英	2	豊川	2	愛知学院愛知	2	世羅	2	東海大附福岡	2	花輪	2	藤枝明誠	2	西京	2	学法石川	2
遊学館	2	八戸学院光星	2	その他	44	加藤学園	2	一関学院	2	倉敷	2	九州学院	2	松山工	2	その他	33	山形東	2
流通経大附柏	2	その他	28			学法石川	2	九州学院	2	那須拓陽	2	札幌山の手	2	村上桜ヶ丘	2			明和	2
その他	45					桐生	2	東京学館新潟	2	愛知学院愛知	2	千原台	2	コザ	2			その他	51
						作新学院	2	伊勢崎商	2	相洋	2	米子松陰	2	秋田工	2				
						札幌山の手	2	興譲館	2	水城	2	浜松日体	2	伊賀白鳳	2				
						水城	2	西京	2	花輪	2	大阪桐蔭	2	青森山田	2				
						西京	2	恵庭南	2	宮古	2	豊川工	2	東農大二	2				
						西脇工	2	遊学館	2	東海大浦安	2	東海大附山形	2	大阪	2				
						那須拓陽	2	その他	54	小林	2	その他	59	佐久長聖	2				
						柏南	2			綾部	2			学法石川	2				
						八千代松陰	2			東海大附四	2			花輪	2				
						その他	77			東海大附望洋	2			東京実	2				
										美方	2			八幡浜	2				
										報徳学園	2			その他	66				
										豊川	2								
										洛南	2								
										その他	38								

青山学院に進学した学生の出身高校は 65 校あり、九州学院高等学校（以下、九州学院）が 9 名で最も多かった。次いで世羅高等学校（以下、世羅）の 7 名、豊川高等学校（以下、豊川）の 4 名となった。九州学院からは 2018 年を除く 7 年間、選手を獲得していた。輩出人数が 1 名の学校が 45 校あり、全体の 45%を占めていた。

神奈川に進学した学生の出身高校は 47 校あり、愛知学院愛知が 7 名で最も多かった。次いで西脇工業高等学校（以下、西脇工）と鳥栖工業高等学校（以下、鳥栖工）、藤沢翔陵高等学校（以下、藤沢翔陵）の 6 名、藤枝明誠高等学校（以下、藤枝明誠）、高知農業高等学校（以下、高知農）の 5 名となった。輩出人数が 1 名の学校が 28 校あり、全体の 29%を占めていた。

駒澤に進学した学生の出身高校は 62 校あり、駒澤大学高等学校（以下、駒大）が 5 名で最も多かった。次いで伊賀白鳳高等学校（以下、伊賀白鳳）、一関学院、大分東明高等学校（以下、大分東明）、豊川工業高等学校（以下、豊川工）が 4 名、花咲徳栄高等学校（以下、花咲徳栄）、市船橋、西脇工、青森山田高等学校（以下、青森山田）、倉敷高等学校（以下、倉敷）の 3 名であった。輩出人数が 1 名の学校が 44 校あり、全体の 46%を占めてい

た。

順天堂に進学した学生の出身高校は 106 校あり、前橋育英高等学校（以下、前橋育英）、浜松日体高等学校（以下、浜松日体）が 5 名で最も多かった。次いで小林、世羅、大牟田の 4 名、高崎高等学校（以下、高崎）、佐野日本大学高等学校（以下、佐野日大）、専修大学松戸高等学校（以下、専大松戸）、田村、白石高等学校（以下、白石）、富山商業高等学校（以下、富山商）、福岡大学附属大濠高等学校（以下、福岡大附大濠）、洛南、諫早高等学校（以下、諫早）の 3 名となった。輩出人数が 1 名の学校が 77 校あり、全体の 49%を占めていた。

帝京に進学した学生の出身高校は 80 校あり、清風高等学校（以下、清風）、加藤学園、東北高等学校（以下、東北）、前橋育英が 4 名で最も多かった。次いで八戸学院光星高等学校（以下、八戸学院光星）、市船橋、光明学園相模原高等学校（以下、光明相模原）、柏市立柏高等学校（以下、市柏）、西条農業高等学校（以下、西条農）、大分東明、那須拓陽高等学校（以下、那須拓陽）、武蔵越生高等学校（以下、武蔵越生）の 3 名となった。輩出人数が 1 名の学校が 54 校あり、全体の 44%を占めていた。

東海に進学した学生の出身高校は 73 校あり、佐久長聖高等学校（以下、佐久長聖）が 8 名で最も多かった。次いで八千代松陰高等学校（以下、八千代松陰）の 6 名、伊賀白鳳、須磨学園高等学校（以下、須磨学園）、西脇工、九州学院の 5 名となった。輩出人数が 1 名の学校が 38 校あり、全体の 27%を占めていた。10 大学の中で輩出人数が 1 名の学校の割合が最も低かった。

東洋に進学した学生の出身高校は 72 校あり、東京農業大学第三高等学校（以下、東農大三）と那須拓陽が 4 名で最も多かった。次いで学法石川、武蔵越生、浜松商業高等学校（以下、浜松商）、遊学館高等学校（以下、遊学館）の 3 名となった。輩出人数が 1 名の学校が 59 校あり、全体の 50%を占めていた。10 大学の中で輩出人数が 1 名の学校の割合が最も高かった。

日本体育に進学した学生の出身高校は 97 校あり、大牟田が 7 名で最も多かった。次いで西脇工、九州学院、豊川工業高等学校（以下、豊川工）、洛南の 5 名、浜松日体、熊本市立千原台高等学校（以下、千原台）、島田高等学校（以下、島田）の 4 名となった。輩出人数が 1 名の学校が 66 校あり、全体の 43%を占めていた。

明治に進学した学生の出身高校は 51 校あり、須磨学園が 9 名で最も多かった。次いで國學院大學久我山高等学校（以下、国学院久我山）の 6 名、洛南、世羅、浜松日体、倉敷の 4 名となった。輩出人数が 1 名の学校が 33 校あり、全体の 37%を占めていた。

早稲田に進学した学生の出身高校は 71 校あり、早稲田実業学校（以下、早稲田実業）が 8 名で最も多かった。次いで佐久長聖の 5 名、時習館高等学校（以下、時習館）の 4 名となった。輩出人数が 1 名の学校が 51 校あり、47%を占めていた。

10 大学への輩出校は 389 校あった。複数人輩出している学校は 175 校あった。10 大学への輩出が最も多かったのは西脇工で 30 名であった。次いで九州学院 27 名、世羅 25 名、佐久長聖 22 名、浜松日体 21 名、伊賀白鳳、大牟田 20 名となっていた。

第 3 節 箱根駅伝出場選手輩出状況

各大学から箱根駅伝に出場した学生の出身校は以下の表の通りとなった。

表 13 箱根駅伝出場選手の出身高校

高校名	青山学院	高校名	神奈川	高校名	駒澤	高校名	順天堂	高校名	帝京	高校名	東海	高校名	東洋	高校名	日本体育	高校名	明治	高校名	早稲田
豊川	7	愛知学院愛知	8	伊賀白鳳	7	浜松日体	6	市柏	5	佐久長聖	5	遊学館	8	豊川工	8	浜松日体	5	浜松日体	6
西京	4	藤沢翔陵	6	青森山田	5	伊勢崎清明	4	関根学園	4	秋田工	5	那須拓陽	5	大牟田	5	須磨学園	4	鹿児島実	5
加藤学園	3	東京実	5	市船橋	4	佐野日大	4	常葉学園橘	3	綾部	4	埼玉栄	4	加藤学園	4	諫早	3	市船橋	4
九州学院	3	宇和島東	4	世羅	4	愛知学院愛知	3	津島	3	埼玉栄	4	学法石川	3	九州学院	4	愛知学院愛知	2	群馬県中央中等	3
須磨学園	3	豊川工	4	西脇工	4	学法石川	3	徳島科技	3	美方	4	豊川	3	藤沢翔陵	4	伊賀白鳳	2	西脇工	3
世羅	3	九州学院	3	大分東明	4	浜松湖東	3	いなべ総合学園	2	つるぎ	3	つるぎ	2	順天	3	学法石川	2	早稲田実業	3
白鷗大足利	3	鳥栖工	3	昭和一学	3	法政二	3	久御山	2	九州学院	3	黒沢尻北	2	世羅	2	作新学院	2	鳥栖工	3
竜ヶ崎一	3	伊賀白鳳	2	学法石川	2	宮崎工	2	市船橋	2	倉敷	3	市川口	2	西京	2	鹿児島実	2	龍野	3
札幌山の手	2	加藤学園	2	倉敷	2	小林	2	西条農	2	大牟田	3	小林	2	西脇工	2	世羅	2	桂	2
中大大附中京	2	関大北陽	2	瓊浦	2	水城	2	柏日体	2	宇和	2	仙台育英	2	倉敷南	2	西京	2	高松工業	2
鶴崎工	2	高知農	2	益田清風	1	西京	2	函館大有斗	2	西脇工	2	東農大二	2	那須拓陽	2	西武文理	2	成田	2
東北	2	藤枝明誠	2	喜多方	1	専大松戸	2	武蔵越生	2	南多摩	2	武蔵越生	2	鉦田一	2	西脇工	2	早稲田本庄	2
柏日体	2	洛南	2	駒大	1	相洋	2	米子松陰	2	洛南	2	一関学院	1	伊賀白鳳	1	東海大附山形	2	豊川工	2
豊川工	2	益田清風	1	埼玉栄	1	長生	2	一関学院	1	岡崎城西	1	館林	1	熊本工	1	九州国大附	1	佐久長聖	1
流通経大附柏	2	松山商	1	作新学院	1	洛南	2	加藤学園	1	桐生南	1	吉原工	1	出水中央	1	鹿児島城西	1	時習館	1
佐久長聖	1	西脇工	1	松山北	1	加藤学園	1	会津学風	1	須磨学園	1	九州学院	1	西条農	1	水城	1	秋田	1
山形南	1	大原	1	西武台千葉	1	作新学院	1	古川工	1	東海大附三	1	山形中央	1	千原台	1	専大松戸	1	新居浜西	1
西武台千葉	1	大牟田	1	鳥取中央育英	1	秋田工	1	光明相模原	1	東海大附四	1	鹿児島城西	1	島田	1	倉敷	1	世羅	1
大阪桐蔭	1			鳥栖工	1	前橋育英	1	市松戸	1	那須拓陽	1	秋田中央	1	東農大二	1	八戸学院光星	1	西武文理	1
八千代松陰	1			東北	1	大牟田	1	鹿児島商	1	福島	1	大牟田	1	東北	1	米子松陰	1	草津東	1
利府	1			豊川工	1	白石	1	西湖	1	豊川	1	東農大三	1	八幡浜	1	洛南	1	東農大二	1
和歌山北	1			明成	1	八千代松陰	1	西武台千葉	1			日章学園	1	洛南	1			福岡大附大濠	1
				遊学館	1	福岡大附大濠	1	大分東明	1			八戸学院光星	1					明和	1
								滝川西	1			水取沢	1						
								東京学園新潟	1			和歌山北	1						
								東北	1										
								那須拓陽	1										
								白石	1										
								明成	1										

青山学院の箱根駅伝出場者の出身高校は 22 校あり、豊川が 7 名で最も多かった。次に西京高等学校（以下、西京）の 4 名、加藤学園、九州学院、須磨学園、世羅、白鷗大足利、竜ヶ崎第一高等学校（以下、竜ヶ崎一）の 3 名となった。

また、これら 8 校のうち、豊川、九州学院、世羅の 3 校は入学校の上位 3 校となっていた。

神奈川の箱根駅伝出場者の出身高校は 18 校あり、愛知学院愛知が 8 名で最も多かった。次に藤沢翔陵の 6 名、東京実業高等学校（以下、東京実）の 5 名となった。

また、これら 3 校のうち、愛知学院愛知、藤沢翔陵の 2 校は入学校の上位 6 校に入っていた。

駒澤の箱根駅伝出場者の出身高校は 23 校あり、伊賀白鳳が 7 名で最も多かった。次に青森山田の 5 名、市船橋、世羅、西脇工、大分東明の 4 名となった。

また、これら 6 校のうち、伊賀白鳳、青森山田、大分東明、市船橋、西脇工の 5 校は入学校の上位 10 校に入っていた。

順天堂の箱根駅伝出場者の出身高校は 23 校あり、浜松日体が 6 名で最も多かった。次に伊勢崎清明高等学校（以下、伊勢崎清明）、佐野日大の 4 名、愛知学院愛知、学法石川、浜松湖東高等学校（以下、浜松湖東）、法政大学第二高等学校（以下、法政二）の 3 名となった。

また、これら 7 校のうち、浜松日体、佐野日大の 2 校は入学校の上位 14 校に入っていた。

帝京の箱根駅伝出場者の出身高校は 29 校あり、市柏が 5 名で最も多かった。次に関根学園高等学校（以下、関根学園）の 4 名、常葉大学附属橘高等学校（以下、常葉学園橘）、津島高等学校（以下、津島）、徳島科学技術

高等学校（以下、徳島科技）の3名となった。

また、これら5校のうち、市柏は入学校の上位11校に入っていた。

東海の箱根駅伝出場者の出身高校は21校あり、佐久長聖と秋田工が5名で最も多かった。次に綾部高等学校（以下、綾部）、埼玉栄、美方高等学校（以下、美方）の4名、つるぎ高等学校（以下、つるぎ）、九州学院、倉敷、大牟田の3名となった。

また、これら9校のうち、佐久長聖、九州学院の2校は入学校の上位6校に入っていた。

東洋の箱根駅伝出場者の出身高校は25校あり、遊学館が8名で最も多かった。次に那須拓陽の5名、埼玉栄の4名となった。

また、これら3校のうち、遊学館、那須拓陽の2校は入学校の上位6校となっていた。

日本体育の箱根駅伝出場者の出身高校は22校あり、豊川工が8名で最も多かった。次に大牟田の5名、加藤学園、九州学院、藤沢翔陵の4名となった。

また、これら5校のうち、豊川工、大牟田、九州学院の3校は入学校の上位8校に入っていた。

明治の箱根駅伝出場者の出身高校は21校あり、浜松日体が5名で最も多かった。次に須磨学園の4名、諫早の3名となった。

また、これら3校のうち、浜松日体、須磨学園の2校は入学校の上位6校に入っていた。

早稲田の箱根駅伝出場者の出身高校は23校あり、浜松日体が6名で最も多かった。次に鹿児島実の5名、市船橋の4名となった。

また、これら3校は入学校の上位3校に入っていなかった。

第4節 箱根駅伝出場選手の在学中の成長

各大学の出場選手数と5000m高校ベスト記録は以下のようにになっていた。

表 14 高校ベスト記録順位ごとの人数

	青山学院	神奈川	駒澤	順天堂	帝京	東海	東洋	日本体育	明治	早稲田
50位以内	19	11	17	10	4	18	21	9	23	19
51位以上 100位以内	5	6	5	4	4	2	2	11	3	4
101位以上 150位以内	2	3	3	7	11	3	3	3	2	1
151位以降	1	7	4	5	12	2	3	4	0	3
不明	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0
合計	27	27	29	27	31	26	29	27	28	27

明治が50位以内の選手を最も多く出場させており、高校時代に上位の実力を持った選手を多く出場させていた。51位～100位の選手は日本体育、101位～150位の選手と151位以降の選手は帝京が最も多かった。箱根駅伝出場選手の在学中の成長は以下のようにになっていた。

表 15 在学中の記録の伸び

	青山学院	神奈川	駒澤	順天堂	帝京	東海	東洋	日本体育	明治	早稲田	10大学平均
5000m	00:19.83	00:15.49	00:19.72	00:19.14	00:20.59	00:20.51	00:14.25	00:19.52	00:11.19	00:14.38	00:17.46
10000m	01:06.53	00:48.85	00:43.54	00:48.17	01:07.53	00:44.61	00:36.28	00:54.38	00:56.53	00:39.89	00:50.63
ハーフマラソン	0:02:09	0:01:18	0:02:18	0:01:55	0:01:19	0:01:41	0:01:37	0:01:57	0:01:19	0:01:29	0:01:42
5000m 記録未更新人数	0	6	4	2	2	2	6	2	7	4	3.5
10000m 記録未更新人数	4	2	8	1	2	4	4	0	2	2	2.9
ハーフマラソン 記録未更新人数	6	7	2	8	4	8	5	4	11	7	6.2

5000m においては帝京が最も記録を伸ばしており、明治は記録の伸びが最も少なかった。帝京と明治では記録の伸びに 9 秒 4 の差が生まれていた。

10000m は帝京が最も記録を伸ばしており、東洋は記録の伸びが最も少なかった。帝京と東洋では記録の伸びに 31 秒 25 の差が生まれていた。

ハーフマラソンは駒澤が最も記録を伸ばしており、神奈川は記録の伸びが最も少なかった。駒澤と神奈川では記録の伸びに 1 分 19 の差が生まれていた。

青山学院と日本体育は全種目で 10 大学平均以上の伸びを記録している。

青山学院は箱根駅伝に出場した選手全員が在学中に 5000m のベスト記録を更新していた。日本体育は全員が 10000m の記録を更新していた。

帝京と日本体育は全種目で記録未更新者数が 10 大学平均以下となっていた。

5000m で 10 大学平均以上の伸びを記録した選手の出身高校は以下のようになっていた。

表 16 10 大学平均以上の伸びを記録した選手の出身高校(5000m)

青山学院	神奈川	駒澤	順天堂	帝京	東海	東洋	日本体育	明治	早稲田
豊川(2)	愛知学院 愛知(3)	昭和一学	秋田工	市柏(2)	美方(2)	遊学館	豊川工(2)	八戸学院 光星	鹿児島実(2)
和歌山北	関大北陽(2)	瓊浦	伊勢崎 清明	常葉学園 橘	大牟田	学法石川	島田	西京	成田
竜ヶ崎一	藤枝明誠	大分東明	法政二	関根学園	倉敷	吉原工	世羅	須磨学園	西武文理
鶴崎工	松山商	東北	洛南	古川工	洛南	豊川	出水中央	東海大附 山形	新居浜西
柏日体	加藤学園	市船橋	加藤学園	津島	東海大 附四	市川口	熊本工	浜松日体	龍野
流通経大 附柏	宇和島東	益田清風	佐野日大	徳島科技	那須拓陽	館林	西条農	西武文理	高松工芸
西京	洛南	世羅	浜松湖東	いなべ 総合学園	岡崎城西	大牟田	九州学院	伊賀白鳳	明和
加藤学園	大牟田	西脇工	愛知学院 愛知	明成	佐久長聖	つるぎ	大牟田	鹿児島 城西	早稲田 本庄
九州学院	高知農	喜多方	長生	米子松陰	つるぎ	仙台育英	藤沢翔陵	世羅	時習館
山形南	伊賀白鳳	遊学館	相洋	柏日体	綾部	黒沢尻北	倉敷南	洛南	秋田
佐久長聖	大原	駒大	水城	市船橋	宇和	九州学院	順天		
豊川工		倉敷	福岡大附 大濠	白石	南多摩	日章学園	鉾田一		
西武台千葉		鳥取中央 育英	浜松日体	函館大 有斗	桐生南	秋田中央	東農大二		
世羅		松山北		西条農	福島		東北		
		西武台千葉		武蔵越生			西京		
		作新学院		鹿児島商			千原台		
				東京学館 新潟					
				滝川西					
				東北					
				会津学鳳					
				西湘					

10000m で 10 大学平均以上の伸びを記録した選手の出身高校は以下のようになっていた。

表 17 10 大学平均以上の伸びを記録した選手の出身高校(10000m)

青山学院	神奈川	駒澤	順天堂	帝京	東海	東洋	日本体育	明治	早稲田
豊川(2)	愛知学院 愛知(4)	大分東明(2)	法政二	市柏(2)	須磨学園	遊学館(2)	豊川工(2)	伊賀白鳳(2)	鹿児島実(2)
世羅(2)	関大北陽(2)	昭和一学	前橋育英	市船橋(2)	東海大 附四	八戸学院 光星	島田	世羅	桂
九州学院(2)	松山商	瓊浦	学法石川	関根学園	岡崎城西	豊川	大牟田	学法石川	世羅
和歌山北	伊賀白鳳	埼玉栄	加藤学園	津島	つるぎ	那須拓陽	那須拓陽	専大松戸	草津東
竜ヶ崎一		喜多方	白石	徳島科技	宇和	館林	熊本工	西京	浜松日体
柏日体		青森山田	佐野日大	米子松陰	南多摩	つるぎ	西条農	須磨学園	高松工芸
八千代松陰		倉敷	大牟田	柏日体	埼玉栄	黒沢尻北	九州学院	西脇工	秋田
西京		鳥取中央 育英	浜松湖東	白石	福島	学法石川	洛南	米子松陰	
山形南		伊賀白鳳	愛知学院 愛知	西条農	美方		西京	作新学院	
豊川工		作新学院	長生	武蔵越生			倉敷南	浜松日体	
中京大附 中京			浜松日体	滝川西			伊賀白鳳	鹿児島実	
東北			福岡大附 大濠	会津学鳳			順天		
西武台千葉				西湘			東北		
				光明 相模原					
				一関学院					
				那須拓陽					

ハーフマラソンで 10 大学平均以上の伸びを記録した選手の出身高校は以下のようになっていた。

表 18 10 大学平均以上の伸びを記録した選手の出身高校(ハーフマラソン)

青山学院	神奈川	駒澤	順天堂	帝京	東海	東洋	日本体育	明治	早稲田
世羅(2)	藤沢翔陵(2)	昭和一学	浜松日体(3)	市柏(2)	須磨学園	遊学館	大牟田(2)	須磨学園(3)	群馬県中央中等
和歌山北	東京実	瓊浦	学法石川	加藤学園	倉敷	小林	世羅	伊賀白鳳(2)	西武文理
山形南	鳥栖工	埼玉栄	洛南	明成	東海大附四	埼玉栄	出水中央	八戸学院光星	草津東
豊川	愛知学院愛知	大分東明	加藤学園	柏日体	つるぎ	八戸学院光星	熊本工	浜松日体	西脇工
須磨学園	洛南	東北	白石	市船橋	宇和	那須拓陽	九州学院	西武文理	福岡大附大濠
佐久長聖	豊川工	市船橋	専大松戸	函館大有斗	南多摩	市川口	洛南		新居浜西
豊川工	伊賀白鳳	鳥栖工	西京	西条農	桐生南	大牟田	倉敷南		高松工芸
中京大附中京		豊川工	長生	東京学館新潟	埼玉栄	東農大三	伊賀白鳳		秋田
札幌山の手		西脇工	水城	西湘	福島	黒沢尻北	鉾田一		
東北		喜多方				学法石川	東農大二		
西武台千葉		青森山田				和歌山北	東北		
利府		駒大					西京		
		倉敷							
		鳥取中央育英							
		松山北							
		明成							
		西武台千葉							
		作新学院							

全種目で 10 大学平均以上の伸びを記録した選手の出身高校は以下のようになっていた。

表 19 10 大学平均以上の伸びを記録した選手の出身高校(全種目)

青山学院	神奈川	駒澤	順天堂	帝京	東海	東洋	日本体育	明治	早稲田
和歌山北	愛知学院愛知	昭和一学	加藤学園	市柏(2)	東海大附四	黒沢尻北	熊本工	須磨学園	高松工芸
山形南	伊賀白鳳	瓊浦	長生	柏日体	つるぎ		倉敷南	浜松日体	秋田
豊川		大分東明		市船橋	宇和		東北	伊賀白鳳	
豊川工		喜多方		西条農	南多摩				
西武台千葉		倉敷		西湘	福島				
世羅		鳥取中央育英							
		作新学院							

各種目で 10 大学平均以上の伸びを記録した選手の人数は以下のようになっていた。

表 20 10 大学平均以上の伸びを記録した選手の出身高校(人数)

	青山学院	神奈川	駒澤	順天堂	帝京	東海	東洋	日本体育	明治	早稲田
5000m	15	14	16	13	22	15	13	17	10	11
10000m	16	8	11	12	18	9	9	14	12	8
ハーフ マラソン	13	8	18	11	10	9	11	13	8	8
全種目	6	2	7	2	6	5	1	3	3	2

5000m、10000m は帝京が最も多く、ハーフマラソンと全種目では駒澤が最も多かった。

また、最も少なかったのは 5000m は明治、10000m は神奈川、早稲田、ハーフマラソンは神奈川、明治、早稲田、全種目は東洋であった。

表 21 10 大学平均以上の伸びを記録した選手の出身高校(まとめ)

5000m 更新者高校	人数	10000m 更新者高校	人数	ハーフマラソン 更新者高校	人数
世羅	4	愛知学院愛知	5	須磨学園	5
洛南	4	伊賀白鳳	5	伊賀白鳳	4
愛知学院愛知	4	世羅	4	浜松日体	4
大牟田	4	豊川工	4	世羅	3
豊川	3	豊川	3	豊川工	3
西京	3	西京	3	東北	3
加藤学園	3	九州学院	3	洛南	3
九州学院	3	学法石川	3	埼玉栄	3
豊川工	3	浜松日体	3	大牟田	3
東北	3	那須拓陽	3	和歌山北	2
柏日体	2	鹿児島実	3	西武台千葉	2
西武台千葉	2	柏日体	2	鳥栖工	2
佐久長聖	2	東北	2	藤沢翔陵	2
関大北陽	2	関大北陽	2	市船橋	2
伊賀白鳳	2	埼玉栄	2	西脇工	2
市船橋	2	大分東明	2	倉敷	2
遊学館	2	作新学院	2	学法石川	2
倉敷	2	大牟田	2	加藤学園	2
浜松日体	2	白石	2	西京	2
市柏	2	市柏	2	明成	2
西条農	2	市船橋	2	市柏	2
つるぎ	2	米子松陰	2	八戸学院光星	2
美方	2	西条農	2	西武文理	2
西武文理	2	須磨学園	2		
鹿児島実	2	つるぎ	2		
		遊学館	2		

5000m で 10 大学平均以上の伸びを記録したのは、世羅、洛南、愛知学院愛知、大牟田の各 4 名が最も多かった。

10000m で 10 大学平均以上の伸びを記録したのは、愛知学院愛知、伊賀白鳳の各 5 名が最も多かった。

ハーフマラソンで 10 大学平均以上の伸びを記録したのは、須磨学園の 5 名が最も多かった。

表 22 青山学院の在学中の記録の伸び以上の選手の出身高校

5000	10000	ハーフ マラソン	全種目更新
豊川(2)	九州学院(2)	世羅(2)	和歌山北
和歌山北	和歌山北	和歌山北	山形南
竜ヶ崎一	竜ヶ崎一	山形南	豊川
鶴崎工	柏日体	豊川	西武台千葉
柏日体	山形南	須磨学園	世羅
西京	豊川	佐久長聖	
加藤学園	中京大附 中京	豊川工	
九州学院	東北	中京大附 中京	
山形南	西武台千葉	札幌山の手	
佐久長聖	世羅	東北	
豊川工		西武台千葉	
西武台千葉			
世羅			

5000m で大学平均の伸び以上だった選手は 14 名おり、豊川が 2 名いた。

10000m で大学平均の伸び以上だった選手は 11 名おり、九州学院が 2 名いた。

ハーフマラソンで大学平均の伸び以上だった選手は 12 名おり、世羅が 2 名いた。

全ての種目で大学平均の伸び以上だった選手は 5 名おり、複数人輩出している高校はなかった。

表 23 神奈川の在学中の記録の伸び以上の選手の出身高校

5000	10000	ハーフ マラソン	全種目更新
愛知学院 愛知(3)	愛知学院 愛知(4)	愛知学院 愛知(2)	愛知学院 愛知(2)
東京実(2)	関大北陽(2)	藤沢翔陵(2)	伊賀白鳳
関大北陽(2)	松山商	東京実	
藤枝明誠	東京実	鳥栖工	
松山商	伊賀白鳳	藤枝明誠	
加藤学園		宇和島東	
宇和島東		洛南	
洛南		豊川工	
大牟田		伊賀白鳳	
高知農			
伊賀白鳳			
大原			

5000m で大学平均の伸び以上の伸びがあった選手は 16 名おり、愛知学院愛知が 3 名いた。

10000m で大学平均の伸び以上だった選手は 9 名おり、愛知学院愛知が 4 名いた。

ハーフマラソンで大学平均の伸び以上だった選手は 11 名おり、愛知学院愛知と藤沢翔陵が 2 名いた。

全ての種目で大学平均の伸び以上だった選手は 3 名おり、愛知学院愛知が 2 名いた。

表 24 駒澤の在学中の記録の伸び以上の選手の出身高校

5000	10000	ハーフ マラソン	全種目更新
昭和一学	大分東明(2)	昭和一学	昭和一学
瓊浦	伊賀白鳳(2)	東北	喜多方
大分東明	昭和一学	市船橋	倉敷
市船橋	瓊浦	鳥栖工	鳥取中央 育英
益田清風	埼玉栄	豊川工	
世羅	豊川工	西脇工	
西脇工	喜多方	喜多方	
喜多方	青森山田	青森山田	
遊学館	倉敷	駒大	
駒大	鳥取中央 育英	倉敷	
倉敷	作新学院	鳥取中央 育英	
鳥取中央 育英		松山北	
松山北		明成	
西武台千葉			
作新学院			

5000m で大学平均の伸び以上だった選手は 15 名おり、複数人輩出している高校はなかった。

10000m で大学平均の伸び以上だった選手は 13 名おり、大分東明、伊賀白鳳が 2 名いた。

ハーフマラソンで大学平均の伸び以上だった選手は 13 名おり、複数人輩出している高校はなかった。

全ての種目で大学平均の伸び以上だった選手は 5 名おり、複数人輩出している高校はなかった。

表 25 順天堂の在学中の記録の伸び以上の選手の出身高校

5000	10000	ハーフ マラソン	全種目更新
秋田工	法政二	浜松日体(3)	加藤学園
伊勢崎清明	前橋育英	洛南	長生
法政二	学法石川	加藤学園	
洛南	加藤学園	白石	
加藤学園	白石	専大松戸	
佐野日大	佐野日大	西京	
浜松湖東	大牟田	長生	
長生	浜松湖東	水城	
相洋	愛知学院 愛知		
水城	長生		
福岡大附 大濠	相洋		
浜松日体	浜松日体		
	福岡大附 大濠		

5000m で大学平均の伸び以上だった選手は 12 名おり、複数人輩出している高校はなかった。

10000m で大学平均の伸び以上だった選手は 13 名おり、複数人輩出している高校はなかった。

ハーフマラソンで大学平均の伸び以上だった選手は 10 名おり、浜松日体が 3 名いた。

全ての種目で大学平均の伸び以上だった選手は 2 名おり、複数人輩出している高校はなかった。

表 26 帝京の在学中の記録の伸び以上の選手の出身高校

5000	10000	ハーフ マラソン	全種目更新
市柏(2)	津島	市柏(2)	市柏
関根学園	市柏	加藤学園	米子松陰
古川工	米子松陰	市船橋	柏日体
津島	柏日体	明成	市船橋
徳島科技	市船橋	米子松陰	西条農
いなべ総合 学園	西条農	柏日体	西湘
米子松陰	武蔵越生	市船橋	
柏日体	滝川西	白石	
市船橋	会津学鳳	函館大有斗	
白石	西湘	西条農	
函館大有斗	光明相模原	東京学館 新潟	
西条農	一関学院	市松戸	
武蔵越生	那須拓陽	西湘	
鹿児島商			
東京学館 新潟			
滝川西			
東北			
会津学鳳			
西湘			

5000m で大学平均の伸び以上だった選手は 20 名おり、市柏が 2 名いた。

10000m で大学平均の伸び以上だった選手は 13 名おり、複数人輩出している高校はなかった。

ハーフマラソンで大学平均の伸び以上だった選手は 14 名おり、市柏が 2 名いた。

全ての種目で大学平均の伸び以上だった選手は 6 名おり、複数人輩出している高校はなかった。

表 27 東海の在学中の記録の伸び以上の選手の出身高校

5000	10000	ハーフ マラソン	全種目更新
倉敷	須磨学園	須磨学園	東海大附四
洛南	東海大附四	倉敷	つるぎ
東海大附四	岡崎城西	東海大附四	宇和
岡崎城西	つるぎ	つるぎ	南多摩
つるぎ	宇和	宇和	福島
綾部	南多摩	南多摩	
宇和	埼玉栄	桐生南	
南多摩	福島	埼玉栄	
桐生南	美方	福島	
福島			

5000m で大学平均の伸び以上だった選手は 10 名おり、複数名輩出している高校はなかった。
 10000m で大学平均の伸び以上だった選手は 9 名おり、複数名輩出している高校はなかった。
 ハーフマラソンで大学平均の伸び以上だった選手は 9 名おり、複数名輩出している高校はなかった。
 全ての種目で大学平均の伸び以上だった選手は 5 名おり、複数名輩出している高校はなかった。

表 28 東洋の在学中の記録の伸び以上の選手の出身高校

5000	10000	ハーフ マラソン	全種目更新
遊学館	遊学館(2)	遊学館	市川口
学法石川	八戸学院 光星	小林	黒沢尻北
氷取沢	豊川	埼玉栄	
山形中央	那須拓陽	八戸学院 光星	
吉原工	市川口	那須拓陽	
豊川	館林	市川口	
市川口	東農大三	大牟田	
館林	つるぎ	東農大三	
大牟田	仙台育英	黒沢尻北	
鹿児島城西	黒沢尻北	学法石川	
つるぎ	学法石川	和歌山北	
仙台育英			
黒沢尻北			
九州学院			
日章学園			
秋田中央			

5000m で大学平均の伸び以上だった選手は 16 名おり、複数名輩出している高校はなかった。
 10000m で大学平均の伸び以上だった選手は 12 名おり、遊学館が 2 名いた。
 ハーフマラソンで大学平均の伸び以上だった選手は 11 名おり、複数名輩出している高校はなかった。
 全ての種目で大学平均の伸び以上だった選手は 2 名おり、複数名輩出している高校はなかった。

表 29 日本体育の在学中の記録の伸び以上の選手の出身高校

5000	10000	ハーフ マラソン	全種目更新
豊川工(2)	豊川工(2)	世羅	熊本工
島田	島田	出水中央	
世羅	大牟田	熊本工	
出水中央	那須拓陽	九州学院	
熊本工	熊本工	大牟田	
西条農	西条農	倉敷南	
九州学院	洛南	伊賀白鳳	
大牟田	西京	鉾田一	
藤沢翔陵	伊賀白鳳	東農大二	
倉敷南	順天	西京	
順天	東北		
鉾田一			
東農大二			
東北			
西京			
千原台			

5000m で大学平均の伸び以上だった選手は 17 名おり、豊川工が 2 名いた。

10000m で大学平均の伸び以上だった選手は 12 名おり、豊川工が 2 名いた。

ハーフマラソンで大学平均の伸び以上だった選手は 10 名おり、複数人輩出している高校はなかった。

全ての種目で大学平均の伸び以上だった選手は 1 名おり、複数人輩出している高校はなかった。

表 30 明治の在学中の記録の伸び以上の選手の出身高校

5000	10000	ハーフ マラソン	全種目更新
浜松日体(2)	伊賀白鳳(2)	須磨学園(3)	須磨学園
鹿児島実(2)	世羅	伊賀白鳳(2)	浜松日体
学法石川	学法石川	倉敷	伊賀白鳳
八戸学院 光星	専大松戸	八戸学院 光星	
諫早	西京	浜松日体	
西京	須磨学園	西武文理	
須磨学園	西脇工	西脇工	
東海大附 山形	米子松陰		
作新学院	作新学院		
西武文理	浜松日体		
伊賀白鳳	鹿児島実		
九州国大附			
鹿児島城西			
世羅			
洛南			
西脇工			

5000m で大学平均の伸び以上だった選手は 18 名おり、浜松日体、鹿児島実が 2 名いた。

10000m で大学平均の伸び以上だった選手は 12 名おり、伊賀白鳳が 2 名いた。
 ハーフマラソンで大学平均の伸び以上だった選手は 10 名おり、須磨学園が 3 名いた。
 全ての種目で大学平均の伸び以上だった選手は 3 名おり、複数人輩出している高校はなかった。

表 31 早稲田の在学中の記録の伸び以上の選手の出身高校

5000	10000	ハーフマラソン	全種目更新
鹿児島実(2)	鹿児島実(2)	群馬県中央中等	高松工芸
成田	成田	西武文理	秋田
西武文理	桂	草津東	
豊川工	世羅	西脇工	
新居浜西	草津東	浜松日体	
龍野	浜松日体	福岡大附大濠	
高松工芸	高松工芸	新居浜西	
明和	時習館	高松工芸	
早稲田本庄	秋田	秋田	
時習館			
秋田			

5000m で大学平均の伸び以上だった選手は 12 名おり、鹿児島実が 2 名いた。
 10000m で大学平均伸び以上だった選手は 10 名おり、鹿児島実が 2 名いた。
 ハーフマラソンで大学平均の伸び以上だった選手は 9 名おり、複数人輩出している高校はなかった。
 全ての種目で大学平均の伸び以上だった選手は 2 名おり、複数人輩出している高校はなかった。

表 32 各距離において上位記録をもつ人数[()]内は在学中に記録を更新した人数]

	青山学院	神奈川	駒澤	順天堂	帝京	東海	東洋	日本体育	明治	早稲田
13分台更新人数	13	8	15	5	6	13	7	8	8	11
28分台更新人数	18	11	12	8	9	8	6	10	16	11
1時間3分18秒切り更新人数	11	6	20	3	9	11	8	7	5	10
高校時代13分台人数	3(3)	0	4(2)	2(1)	0	3(3)	5(4)	0	5(4)	2(2)
1年時28分台人数	3(1)	0	6(4)	2(2)	1(0)	7(6)	6(3)	1(1)	1(1)	1(1)
1年時1時間3分18秒切り人数	5(2)	1(1)	3(1)	2(1)	2(0)	8(1)	4(3)	2(0)	2(0)	5(2)

在学中に 5000m で 13 分台を初めて出した選手は 94 名いた。駒澤が 15 名で最も多く、順天堂が 5 名で最も少なかった。
 在学中に 10000m で 28 分台に記録を更新した選手は 109 名いた。青山学院が 18 名で最も多く、東洋が 6 名で最も少なかった。
 在学中にハーフマラソンで 1 時間 3 分 18 秒未満に記録を更新した選手は 90 名いた。駒澤が 20 名で最も多く、順天堂が 3 名で最も少なかった。
 高校時代に 13 分台を記録していた選手は 24 名おり、19 名が在学中にベスト記録を更新した。東洋と明治が 5 名で最も多く、在学中の更新人数も最も多かった。青山学院、東海、早稲田は全員がベスト記録を更新していた。

1 年時に 28 分台を記録していた選手は 28 名おり、19 名が在学中にベスト記録を更新した。東海が 7 名で最も多く、在学中の更新人数も最も多かった。順天堂、日本体育、明治、早稲田は全員がベスト記録を更新していた。

1 年時に 1 時間 3 分 18 秒を切っていた選手は 34 名おり、11 名が在学中にベスト記録を更新した。東海が 8 名で最も多く、在学中の更新人数は東洋が最も多かった。神奈川は全員がベスト記録を更新していた。

5000m で 10 大学平均以上のタイムを更新した選手は 64 名いた。また、その選手を輩出した高校は 25 校あった。世羅、洛南、愛知学院愛知が 4 名の選手を輩出しており、最も多かった。神奈川は 3 名の選手を愛知学院愛知から獲得していた。

10000m で 10 大学平均以上のタイムを更新した選手は 69 名いた。また、その選手を輩出した高校は 26 校あった。愛知学院愛知、伊賀白鳳が 5 名の選手を輩出しており、最も多かった。神奈川は 4 名の選手を愛知学院愛知から獲得していた。

ハーフマラソンで 10 大学平均以上のタイムを更新した選手は 59 名いた。また、その選手を輩出した高校は 23 校あった。須磨学園が 5 名の選手を輩出しており、最も多かった。明治は 3 名の選手を須磨学園から、順天堂は 3 名の選手を浜松日体から獲得していた。

第5節 三大大学駅伝出場状況

三大大学駅伝に4回出場していた選手と全ての駅伝にエントリーしていた選手は以下のようになっていた。

表 33 大学駅伝4回出場者

出雲4回 出場者 大学名	出雲4回 出場者 出身高校名	全日本4回 出場者 大学名	全日本4回 出場者 出身高校名	箱根4回 出場者 大学名	箱根4回 出場者 出身高校名	全駅伝4回 エントリー者 大学名	全駅伝4回 エントリー者 出身高校名	全駅伝4回 出場者 大学名	全駅伝4回 出場者 出身高校名
青山学院	札幌山の手	青山学院	豊川	青山学院	札幌山の手	青山学院	豊川	青山学院	豊川
青山学院	豊川	駒澤	伊賀白鳳	青山学院	豊川	駒澤	伊賀白鳳	駒澤	伊賀白鳳
青山学院	世羅	駒澤	明成	青山学院	豊川	駒澤	明成	駒澤	明成
駒澤	伊賀白鳳	駒澤	昭和一学	青山学院	西京	駒澤	学法石川	東洋	仙台育英
駒澤	明成	駒澤	世羅	神奈川	愛知学院愛知	駒澤	伊賀白鳳	明治	鹿児島城西
東洋	豊川	帝京	常葉学園橘	神奈川	藤沢翔陵	駒澤	大分東明		
東洋	仙台育英	帝京	関根学園	神奈川	宇和島東	東洋	豊川		
明治	鹿児島城西	東海	綾部	神奈川	豊川工	東洋	仙台育英		
早稲田	時習館	東洋	仙台育英	神奈川	伊賀白鳳	明治	鹿児島城西		
		明治	鹿児島城西	神奈川	東京実	明治	浜松日体		
		明治	鹿児島実	駒澤	西脇工	明治	洛南		
		明治	浜松日体	駒澤	伊賀白鳳	早稲田	早稲田本庄		
		早稲田	時習館	駒澤	明成	早稲田	時習館		
				駒澤	大分東明	早稲田	鳥栖工		
				駒澤	世羅	早稲田	市船橋		
				順天堂	伊勢崎清明				
				順天堂	佐野日大				
				順天堂	浜松湖東				
				順天堂	愛知学院愛知				
				順天堂	相洋				
				順天堂	浜松日体				
				帝京	関根学園				
				東海	綾部				
				東海	佐久長聖				
				東洋	豊川				
				東洋	仙台育英				
				東洋	日章学園				
				東洋	遊学館				
				東洋	埼玉栄				
				日本体育	大牟田				
				日本体育	藤沢翔陵				
				日本体育	西脇工				
				日本体育	加藤学園				
				明治	鹿児島城西				
				明治	鹿児島実				
				明治	作新学院				
				早稲田	早稲田本庄				
				早稲田	龍野				
				早稲田	市船橋				
				早稲田	早稲田実業				

出雲駅伝に4回出場する選手を輩出した大学は青山学院、駒澤、東洋、明治、早稲田の5大学であった。出雲

駅伝に4回出場した選手は9名おり、青山学院の4名が最も多かった。出身高校は8校あり、豊川出身の選手が2名で最も多かった。

全日本駅伝に4回出場する選手を輩出した大学は青山学院、駒澤、帝京、東海、東洋、明治、早稲田の7大学であった。全日本駅伝に4回出場した選手は13名おり、駒澤の4名が最も多かった。出身高校は13校あり、複数人を輩出している高校はなかった。

10大学全てで箱根駅伝に4回出場する選手を輩出していた。箱根駅伝に4回出場した選手は40名おり、神奈川と順天堂の6名が最も多かった。出身高校は34校あり、豊川出身の選手が3名で最も多かった。

全ての駅伝に4回エントリーされた選手を輩出した大学は青山学院、駒澤、東洋、明治、早稲田の5大学であった。全ての駅伝に4回エントリーされた選手は15名おり、駒澤の5名が最も多かった。出身高校は13校あり、伊賀白鳳と豊川出身の選手が2名で最も多かった。

全ての駅伝に4回出場する選手を輩出した大学は青山学院、駒澤、東洋、明治の4大学であった。全ての駅伝に4回出場した選手は5名おり、駒澤の2名が最も多かった。出身高校は5校あり、複数人を輩出している高校はなかった。

豊川出身の選手は大学駅伝の出場者に定着することが多かった。

第6節 代表輩出状況調査

代表選手輩出状況は以下の表のようになった。

表 34 代表選手輩出状況

	青山学院	神奈川	駒澤	順天堂	帝京	東海	東洋	日本体育	明治	早稲田
オリンピック	0	0	0	0	0	2	3	0	0	2
世界選手権	0	0	3	0	0	3	2	0	1	2
アジア選手権	0	1	1	0	0	2	1	1	3	0
U20/世界ジュニア	0	0	2	0	0	3	1	0	2	1
ユニバーシアード	4	1	10	2	2	3	3	2	2	2
日本選手権	1	0	11	1	0	5	12	0	11	6

オリンピックへ輩出しているのは東海、東洋、早稲田の3校であった。東洋は3名の選手を輩出しており、最も多かった。現役選手でオリンピックに出場している選手はいなかった。

世界選手権へ輩出しているのは駒澤、東海、東洋、明治、早稲田の5校であった。駒澤、東海が3名、東洋、早稲田が2名の選手を輩出していた。現役選手で世界選手権に出場している選手はいなかった。

アジア選手権へ輩出しているのは神奈川、駒澤、東海、東洋、日本体育、明治の6校であった。明治が3名、東海が2名の選手を輩出していた。東海と明治からは現役選手が出場していた。

U20/世界ジュニアに輩出しているのは駒澤、東海、東洋、明治、早稲田の5校であった。東海が3名、駒澤、明治が2名輩出していた。

ユニバーシアードへはすべての大学が選手を輩出していた。駒澤が10名で最も多くの選手を輩出していた。次いで青山学院の4名、東海、東洋の3名であった。

日本選手権へ輩出しているのは7校であった。東洋が12名で最も多かった。次いで駒澤、明治の11名、早稲田の6名であった。

東洋、駒澤、東海からは10名以上が世界大会に出場していた。一方で、青山学院、順天堂、帝京はユニバーシアード以外の世界大会には出場していなかった。

第5章 考察

第1節 10大学の選手獲得の傾向

表 35 各カテゴリー別平均獲得人数（再掲）

	青山学院	明治	東海	東洋	駒澤	早稲田	順天堂	神奈川	日本体育	帝京
5位以内	0.6	0.4	0.6	0.8	0.6	0.4	0.1	0.0	0.0	0.0
10位以内	1.3	1.0	1.3	1.1	1.3	1.1	0.4	0.1	0.4	0.0
50位以内	5.1	5.1	4.8	4.1	3.8	3.4	2.8	2.3	1.5	0.6
100位以内	8.0	7.9	7.3	6.5	6.5	4.5	5.5	4.9	4.8	2.6
150位以内	10.0	9.1	10.1	8.4	8.4	5.1	8.0	7.0	6.5	6.1
151位以降	2.5	1.8	7.1	5.6	3.5	8.3	9.4	5.1	12.6	9.1

青山学院、明治、東海、東洋は50位以内の選手を平均で4名以上獲得することに成功している。これは箱根駅伝のエントリー人数である16名を50位以内の選手で確保できている、選手層が厚いチームといえることができる。

駒澤、早稲田、順天堂は50位以内の選手を平均で2.5名以上獲得することに成功している。これは箱根駅伝の出場人数である10名を50位以内の選手で確保できていることになる。

神奈川、日本体育、帝京は50位以内の選手を平均で2.5名以上獲得することに成功していない。これは箱根駅伝の出場人数である10名を50位以内の選手で確保できず、選手層が薄いチームといえることができる。

また青山学院、東海、駒澤は10位以内の選手を平均で1.25名以上獲得することに成功している。これは箱根駅伝の往路出場人数である5名を50位以内選手で確保できていることになる。2015年～2019年の大会においては往路優勝したチームが総合優勝を果たすケースが3回あり、往路の結果が重視されるようになってきている。この3大学は往路にもともと実力のある選手を配置することができる大学といえる。

第2節 選手獲得における特徴

第1項 10位以内選手と50位以内選手の獲得

2012～2019年の箱根駅伝において優勝したのは、東洋、日本体育、青山学院、東海の4校である。日本体育を除いた3校は10位以内と50位以内の選手の獲得に成功している大学である。箱根駅伝は10区間あり、近年では外国人留学生のようなエース選手が1人存在するだけでは優勝することができなくなっている。区間3位程度で走れる選手を10人そろえる方が優勝に近いとされている。区間賞を狙え、流れを変えることのできるエース選手の獲得も重要であるが、それ以上に、質の高い10人をそろえることが重要であるといえる。その点で、青山学院、東海、東洋はもとより実力のある50位以内の選手の獲得に成功しており、区間上位で走れる可能性の高い質の高い選手の獲得に成功している。特にこの層の獲得に最も成功していると考えられる青山学院は2015～2018年にかけて、4連覇を達成している。優勝するチームを目指すためには上位選手の獲得に成功する必要があると考えられる。

第2項 出身校から見る各大学の選手獲得戦略

帝京は箱根駅伝出場者出身高校の上位校が他大学と重なっておらず、独自のリクルーティングが行われていた。

この上位校は全国高校駅伝で入賞しているわけでもないため、独自で有力選手をみつけ獲得できていると考えられる。

青山学院、駒澤、東海、東洋も他大学と重ならず選手獲得を行うことができている。青山学院、駒澤、東海は重なりのない高校に全国高校駅伝で入賞する強豪高校を含んでいる。強豪高校と結びつきを作ることによって安定して有力選手の獲得を行っていると考えられる。青山学院、駒澤、東海は対象期間内に2位以内に入っており、優勝争いに関わるようなチームとなっている。優勝争いを目指すようなチームをつくるためには他大学と重なることなく、全国高校駅伝の入賞校といった実績のある高校から選手を獲得することが重要になる。

神奈川、日本体育、明治、早稲田は箱根駅伝出場者出身高校の上位校の半数以上に他大学との重なりが多くみられる。有力選手を独自で獲得する結びつきがなく、他大学と取り合っているといえる。他大学との取り合いを行わなければいけないため、より良い条件を提示する必要性が生まれ、安定して選手獲得が行えないと考えられる。神奈川、日本体育、早稲田はこういった点からも選手獲得に成功していないのではないかと考えられる。

また、早稲田は系列校からの進学が多くみられるが、これらの選手の多くは箱根駅伝に出場することができていない。他大学と重ならず選手を獲得できる方法があるにも関わらず、十分に生かし切れていない。系列校の選手の強化を図ることで実力のある選手を安定して獲得できるようになり、大学駅伝チームの強化につながると考えられる。

第3節 在学期間中の成長の傾向

青山学院は上位選手の獲得に成功し、箱根駅伝出場選手全体の在学中の記録更新にも成功しているチームといえる。在学中の記録更新には、ピーキングを行う習慣などが影響していると考えられる。青山学院では1年間の強化サイクルを入学後のミーティングですぐ伝えられる。また、1か月単位など長期スパンでのスケジュールが公開され、曜日ごとの練習の系統も決まっている。強化サイクルが明らかになっていることで、各選手が練習の目的を理解することができ、自分自身がピークを合わせるべき大会に向け、練習を行うことができる。長期スパンで練習が公開されていることにより、選手はスケジュールに応じた準備を行うことができる。故障から復帰段階の選手であれば事前に監督やスタッフと量やスピードについて相談を行うことができ、状態に応じて練習を行うことが可能となっている。監督が選手寮に住み込んでいることもあり、練習や自身の状況についての相談が行いやすい環境も整っている。1年時から強化サイクルを理解することと自分自身の状態を把握する訓練を行うことで記録の更新が行えていると考えられる。

駒澤はハーフマラソンでの記録の向上が最も多くみられ、走行距離を伸ばすことに成功しているチームだと考えられる。また、高校時にはトラックでの5000mやロードでの10kmが主に走られるが、大学時にはロードでのハーフマラソンや各区間10km前後の駅伝も行われるようになる。距離に適応できず、高校時の5000mで実績のあった選手が伸び悩むこともみられるが、駒澤はこの距離に適応できる練習が行われていると考えられる。走り込みなどを行うことでハーフマラソンなどの長い距離に適応した選手を育成できていると考えられる。

東洋や東海は上位選手の獲得に成功し、上位選手が記録を更新することに成功している。もともと実力のある選手がより記録を伸ばす環境が整っていると考えられる。この2大学は海外への遠征を積極的に行うなど世界のトップに触れるような環境が作られている。高地でのトレーニングや自分たちの実力以上の選手とレースを行うことによって上位選手においても記録を向上させることができていると考えられる。

日本体育、早稲田はもともと上位記録を持つ選手は少ないものの、在学中に記録を更新し、在学中に上位記録を出す選手が多いと考えられる。早稲田は推薦で獲得できる人数が少なく、多数の上位選手の選手獲得を行にくいチームである。箱根駅伝では4年生の出場が多くみられ、時間をかけて、故障しない体をつくり、練習を継続させることで各距離においてタイムを向上させ、上位に進出するチームを作り上げているといえる。日本体育

は各距離においてほとんどの選手が自己記録を更新している。先行研究にあったように各距離において選手が自己記録を更新することは今後の上位選手の獲得にもつながってくると考えられる。

明治は選手獲得には成功しているが記録の更新には成功していない。ハーフマラソンで記録を更新できない選手が多く大学での長い距離に対応できない選手が多いと考えられる。5000m においても記録を更新できていない選手が多く、記録の伸びも小さい。高校時代にピークを迎えてしまい、大学で成長できていない選手が多いと考えられる。近年ではシードを落としていたり、本戦の出場を逃したりするなど低迷がみられるため、今後は獲得した上位選手を成長させることで優勝争いに関わるようなチームをつくることができると考えられる。

神奈川や順天堂は上位選手の獲得に成功しておらず、ハーフマラソンでの記録更新もあまりできていない。この2大学は1度しか5位以内に入っていない。もともとの記録もあまりよくないが、在学中に記録を更新できない選手も多く、長い距離への対応ができていないため、安定して上位の成績を収めることができていないと考えられる。神奈川は愛知学院愛知の選手が多く記録を伸ばしており、特定の学校の選手が記録を伸ばしている傾向がある。

世羅や洛南、大牟田、伊賀白鳳は複数の大学で10大学平均以上の伸びを記録する選手を輩出しており、どの大学でも活躍する選手となっている。愛知学院愛知、浜松日体、須磨学園は特定の大学で伸びを記録する選手を輩出している。成長できる大学を選択することも重要である。

第4節 在学中の成長における特徴

第1項 出場選手全体の記録の向上

日本体育や帝京は上位選手の獲得に成功していないものの、5位以内に入るチームをつくることができている。これらのチームは全種目において記録の未更新者の人数が10大学の平均以下となっており、ほとんどの選手が記録の更新をしている。突出した選手はいないものの、チーム全員の競技力を向上させることで上位に進出していると考えられる。選手獲得の部分でも述べたが、区間賞をとれるような選手を1人つくるよりも、区間5位以内で走れる選手を10人そろえる方が区間上位にくることと言われている。一部の選手のみが記録を向上させるのではなく、全員が記録を向上させることで選手層に厚みを出していると考えられる。また、原の先行研究でも述べられていたが同一レベルの選手をそろえることで練習負荷の均一化を行うことができる。そのため一体感をもって強化を行うことができ、駅伝におけるチーム力の向上につながっていると考えられる。

第2項 ハーフマラソンにおける記録の向上

青山学院、駒澤、東海、東洋はハーフマラソンにおける記録の向上が際立っているチームであった。東京オリンピックマラソン日本代表を決めるために2019年9月に実施されたマラソングランドチャンピオンシップにおいては東洋出身の選手が最も多く出場しており、青山学院、駒澤と続いていた。そして、日本代表の座は駒澤と東洋出身の選手が勝ち取った。また、駒澤、東海、東洋の選手はOBを含め、多くの選手が世界大会に出場するなど日本を代表する選手に成長している。日本代表になるような選手を輩出することにより、青山学院、駒澤、東海、東洋は選手が成長できる大学のイメージをつくり、高校との信頼関係を構築でき、より上位選手の獲得にも結び付いていると考えられる。長い距離への適応や上位選手の記録の向上によって、OBを含めた世界大会で活躍する選手の輩出や箱根駅伝の上位に進出することができている。

第5節 三大駅伝出場者の定着の特徴

大学三大駅伝の初戦である出雲駅伝に4回出場する選手を多く輩出しているのは上位選手の獲得に成功している大学が多い。出場人数が少なく、距離も短いため、高校時代から実力を持っている選手が出場しやすい傾向

にある。そのため、高校上位選手の獲得に成功することは出雲駅伝に定着する選手をつくることにつながる。

箱根駅伝に 4 回出場する選手が多い大学は神奈川や順天堂といった上位選手の獲得に成功していない大学が入っていた。突出した選手がほとんど入学していないため、1 年生からでも順調に練習を積むことができていれば、出場を勝ち取ることができると考えられる。

駒澤は大学駅伝の出場選手に定着しやすい傾向にある。即戦力になる選手を獲得し、ハーフマラソンや箱根駅伝の距離に対応できるまでに成長させていることがわかった。

第 6 節 研究の限界

本研究では 10 大学のみを対象としており、大学駅伝における選手獲得のすべてを反映しているわけではない。今後さらに対象を広げ、精査することが必要である。

また、今回は高校ベスト記録と出身高校、在学中の記録のみから分析を行ったが、実際の選手獲得の現場では記録以外の部分も重視される場合がある。大学駅伝チームの情報入手には限界があり、記録や実績における検証に留まっている。一般化のためにはさらに研究を進める必要がある。

第 6 章 結論

箱根駅伝で上位に進出するためには、

- ・ 世代別の 5000m ランキングで 10 位以内の選手の獲得と 50 位以内の選手の人数の確保
- ・ 他大学と重ならず全国高校駅伝の入賞校から選手を獲得
- ・ ハーフマラソンにおける記録の向上

が重要であることが明らかになった。

また、上位選手が獲得できなかった際には、同一レベルの選手を獲得し、練習負荷を均一化させることで、全種目の記録を向上させることが重要であることがわかった。

謝辞

本研究を行うに当たり、非常に多くの方々のお力添えやご協力を頂きました。厳しく且つ暖かくご指導くださった平田竹男教授には心より深く感謝申し上げます。

そして、副査の中村好男先生、児玉ゆう子先生、畔蒜洋平先生にも深く感謝申し上げます。また、早稲田大学スポーツ科学研究科でご指導くださった先生方にこの場をお借りしてお礼を申し上げます。

共に勉学に勤しんだ平田研究室学部ゼミの皆様、平田研究室社会人修士 13 期、14 期の皆様、2 年制コースの河野遼兵氏、佐々木大氏、吉鹿奈三子氏をはじめとする先輩方、山根拓郎氏をはじめとする後輩の皆様、そして、同期として 2 年間苦楽を共にした荒木優麻氏、陳博偉氏、三好優太郎氏には大変お世話になりました。心より感謝の意を申し上げます。また、平田竹男研究室への進学の後押しや本研究に協力してくださった青山学院大学陸上競技部監督の原晋氏にも深く感謝申し上げます。

最後に、大学院生活を全面的に応援してもらい、生活面や精神面など様々な部分において支援してもらった家族に、心から感謝します。

引用文献

- ・原晋、平田竹男「青山学院大学駅伝チームの箱根駅伝強化の軌跡-青学大駅伝チームの予選会突破からシード権確保、4連覇まで-」2017年、早稲田大学スポーツ科学研究科修士論文
- ・山下大悟、平田竹男「大学ラグビーにおける選手獲得戦略」2015年、早稲田大学スポーツ科学研究科修士論文
- ・陸上競技ランキング、<https://rikumaga.com>(閲覧日:2020年1月8日)
- ・大学駅伝 2018 春号 陸上競技マガジン 6月号増刊、2018年5月1日、ベースボール・マガジン社
- ・大学駅伝 2017 春号 陸上競技マガジン 6月号増刊、2017年5月2日、ベースボール・マガジン社
- ・大学駅伝 2016 春号 陸上競技マガジン 6月号増刊、2016年5月6日、ベースボール・マガジン社
- ・大学駅伝 2015 春号 陸上競技マガジン 6月号増刊、2015年5月1日、ベースボール・マガジン社
- ・大学駅伝 2014 春号 陸上競技マガジン 6月号増刊、2014年5月1日、ベースボール・マガジン社
- ・大学駅伝 2013 夏号 陸上競技マガジン 6月号増刊、2013年6月10日、ベースボール・マガジン社
- ・大学駅伝 2012 夏号 陸上競技マガジン 6月号増刊、2012年6月4日、ベースボール・マガジン社
- ・大学駅伝 2011 夏号 陸上競技マガジン 6月号増刊、2011年5月1日、ベースボール・マガジン社
- ・日本陸上競技連盟公式サイト「大会情報」、<https://www.jaaf.or.jp/competition/>(閲覧日:2019年12月29日)
- ・公益財団法人日本オリンピック委員会公式サイト「大会」、<https://www.joc.or.jp/sp/index.html>(閲覧日:2019年12月29日)
- ・日本陸上競技選手権大会サイト、<https://www.jaaf.or.jp/jch/103/?ls=%2Ftop>(閲覧日:2019年12月29日)
- ・日本テレビ 第96回箱根駅伝サイト、<https://www.ntv.co.jp/hakone/>(閲覧日:2020年1月6日)
- ・全国高等学校駅伝競走大会公式サイト、<https://mainichi.jp/koukouekiden/>(閲覧日:2020年1月8日)